

19	安城	安城西中学校	名前 すずむらきょうたろう 鈴村京太郎
分科会番号	1	分科会名	国語教育（文学その他）

研究テーマ「物語の構成や表現に着目し、本の帯の作成を通して

他者との関わりの中で考えを深める生徒の育成」

—2年国語科「ヒューマノイド」の実践を通して—

1 テーマ設定の理由

本学級の生徒は、教師の発問に対して、しっかりと自分の考えをもつことができる生徒が多い。一方で、自分の考えを整理したり、表現したりすることが苦手な生徒も少なくない。また、授業中の発問に対して挙手は少ないが、ノートやプリントに自分の考えをしっかりと書いている生徒は多くみられる。発言が少ない理由として、自分の考えを言葉でまとめることができるが、自分の考えを話す場面が少ないことが考えられる。また、自分の考えに自信をもつことができず、説明することを不安に思い、消極的になってしまうことも考えられる。

1学期の終わりに、授業を行っている3学級の生徒に国語の学習に対するアンケート（回答数88人）をしたところ、「クラスの意見を聞くことで自分の意見を深めたり、新しい考え方に気付いたりすることができるようになってきた。（5段階）」の質問には、56人の生徒が「すごく思う」「そう思う」の項目を選んでおり、1学期の学習を通して他者との関わりから自分の学びにつなげられるようになったことを実感している生徒が多い。しかし、本学級（回答数32人）に限定して見てみると「すごく思う」「そう思う」の項目を選んでいる生徒は16人とどまり、学級全体の半分しか実感することができていない。また、12人の生徒は「どちらともいえない」の項目を選んでおり、他者との関わりを自分の学びにつなげることにに対して難しさを感じていることも分かった。

本教材「ヒューマノイド」は、30歳の会社員である「僕」が生きる現在の時間と、「僕」が回想する過去の時間が交差しながら展開する。中学時代の自分を的確に語った「僕」も、現在進行形で体験している感情はうまく言葉にできない。そのため多様な解釈が生まれやすい話である。本の帯を作成する活動を通して、登場人物や伏線の効果について理解し、登場人物の言動や作品のテーマ・キーワードに対して深く追究していけるだろうと考える。そして、活動の中で他者に関わり合う場面を段階的に設定すれば、自分の考えを深めることができるだろうと考え、テーマを設定した。

2 テーマに迫る基本的な考え方

(1) めざす生徒の姿

- ・構成や表現形式に着目して考えをもち、自分の考えを深めることのできる生徒。
- ・考えたことや気付いたことを級友と共有し、学びや成長につなげることのできる生徒。

(2) 研究の仮説

本テーマを通して課題を解決するために、以下の仮説 1 から仮説 3 を設定した。

【仮説 1】

導入において、単元に対する生徒の関心を引き出すような工夫をすれば、生徒の興味・関心・意欲を高め、活動を通して自分なりの意見や考えをもつことができるだろう。

仮説 1 に対する手立て

- ① 導入において、学習課題に対する関心を引き出す工夫をする。
- ② 生徒にとって問題意識もてる主題を設定し、話し合いができる活動を取り入れる。

【仮説 2】

個人の活動、ペアの活動、全体へ共有と、段階ごとに活動の時間を設定すれば、自分の考えに自信をもち、自ら仲間に伝えようとする意欲が芽生えるだろう。

仮説 2 に対する手立て

- ③ 自分で考えをまとめる時間、ペアで考えを伝える時間、全体で意見を共有する時間を数多く確保して、自分の考えを確立し、自信をもって思いを伝えられるような機会を作る。
- ④ 生徒が話し合った結果について、さらにクラス全体で学び合える機会を作る。

3 実 践

(1) 抽出生徒について

生徒 A は、自分の力で積極的に課題に取り組み、解決に向けて考えることができる。しかし、グループによる話し合いの際に、自分の考えをうまく伝えることができずに諦めてしまうことがある。自分の考えをしっかりと伝え、相手の考えを受け入れることで考えを再構築できるようになってほしい。

生徒 B は、国語に対して苦手意識をもっており、自分の考えに自信をもつことができず、グループによる話し合いでは、考えを伝えることができない。しかし、授業に対して前向きに取り組み、時間はかかるが自分の考えを書くことはできる。本単位では、自分で考えをまとめる時間、ペアで考えを伝える時間、全体で意見を共有する時間を数多く確保していくため、少しでも自分の考えに自信をもち、伝えられるようになってほしい。

(2) 仮説 1 に対する実践

生徒の関心を引き出すために、夏休み課題の読書感想文に本の帯に関する内容を書いた生徒を紹介した。本の帯には作品の良さや魅力が表現されていることを伝え、本の帯を知らない生徒や本をそもそも読まない生徒に向けて実物を見せながら紹介することで興味をもたせた。「ヒューマノイド」は今年度から教科書に掲載された作品であり、書き下ろしのため書店には並んでいない作品である。そのため、もし書店で販売することになったら、どんな本の帯を作成すると作品の魅力が伝わるのだろうと問いかけてから、作品を通読し、初発の感想を記入した。

初発の感想の中には、「帯を作るためには、登場人物の関係性が必要である。」や「現在と過

去が出てきた作品だったので、整理をしながら読んでいきたい。」といった作品を深く読み込んでいこうとする意欲的な姿が見られた。また、本教材は登場人物の中学生時代が登場するため、自分と比較して考える生徒もいた。

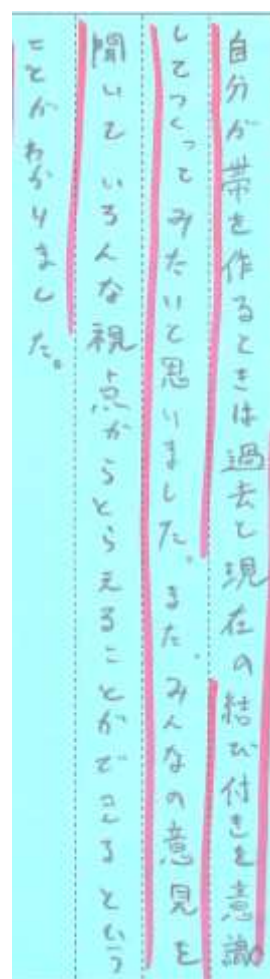
初発の感想を全体で共有する場面を設定し、本の帯を作成するために必要な要素について話し合いを行ったことで、共通の課題をもって作品を考えていくことができた。さらに、「登場人物」「伏線・あらすじ」「キーワード・メッセージ性」と項目を立てて分類して板書したことにより、自分の考えをもつことができていなかった生徒も一つの項目を選んで考えることができた。

(3)仮説2に対する実践

初発の感想の共有から、まずは自分で考え、ペアで共有をしてから、教室内を自由に動いて共有する時間を確保し、全体で共有する時間を設けた。初発の感想はテーマもバラバラで、視点も様々だが、多くの人と共有する時間を作ったことにより、全体での共有の時間にも多くの意見が出てきた。教室内を自由に動いて共有する時間があることで決まった相手だけではなく多くの人の意見を聞くことができ、考えを共有しようとする姿が見られた。

全体で共有する場面では、それまでに話し合った内容と合わせて発言する生徒もいた。発言者が意見を共有していた相手に話をふって、全体に伝えるように促す場面もあった。さらに「カラフルな滴は絵の具のことを言いかえている伏線だと考えられる」と教科書に書かれていることにふれる場面もあり、同じ意見をもつ人と関わったことで得たことを発言に生かす姿も見られた。

【資料1 生徒Bの記述】



4 成果

(1)仮説1に対する成果

夏休み課題の読書感想文に本の帯に関する内容を書いた生徒を紹介したことにより、本の帯に対して興味を示す生徒が多かった。さらに、本の帯を作るためには何が必要なのかを考えながら通読したため、これまでの学習と比べて教科書の記述を抜き出しながら初発の感想を書く生徒が多かった。読むための目的がはっきりとしていることで、必要な情報を確認しながら読むことができたと考えられる。生徒Bも本の帯の作成を意識した記述が見られた。明確な目的があったので、考えながら読み進めることができたと考えられる(資料1)。

そして、「登場人物」「伏線・あらすじ」「キーワード・メッセージ性」と項目を立てて分類したことにより、自分の考えと似た意見について整理することができた。多くの振り返りに「同じ項目を選んでいる人が多かったので注目して考えたい。」や「自分は気付かなかったことについて書いている人もいたので、授業では意識して読んでみようと思う。」という記述があり、作品に対する関心を高めることに有効であった。

(2)仮説2に対する成果

自分で考え、ペアで共有をしてから、教室内を自由に動いて共有する時間を確保し、全体で共有する時間を設けたことにより、様々な意見を知ることができ、自分と似た意見だけではなく、新たな発見や自分とは違う考えにふれる機会が増えた。自分と同じ意見の人が多い場合は、自分の考えに自信をもち、進んで共有する姿が多くみられた。

また、似た意見が少ない場合は自分の意見に自信がもてず、周りの意見を聞くことに専念する姿が見られた。振り返りの中で「友達の意見を聞いて気付かなかったことがあった」や「自分と似た意見をもつ人があまりいなかったのもっといろいろな角度で考えていきたい」という記述があり、新たな発見や自分とは違う考えにふれることで自分の考えを再度見つめなおすことにつながった。

しかし、ペアで共有する時間や教室内を自由に動いて共有する時間では活発に意見交流が行われていたが、全体で共有する時間では意見が出てこなかったこともあったため、自ら仲間に伝えようとする意欲は芽生えていたが、自分の考えに自信をもち、全体で共有するところまでは意欲を高めることはできなかった。生徒Aは教室内を自由に動いて共有する時間ではノートを持ちながら多くの人と意見を共有する姿が見られた。周りの意見をメモしたり自分の考えに付け足したり姿もあったが、全体で共有する場面で発言をすることはなかった。活動の中には、多くの人とすでに共有をしているので全体で共有することへの必要感が薄れてしまった場面もあった。活動の様子を見ながら柔軟に調整していくことが必要である。

話すことに苦手意識をもつ生徒や言葉に詰まってしまう生徒は、決められた相手であれば共有しようと頑張ろうとする姿があった。しかし、クラス内を自由に動いて共有する時間では自分の席に座ったままの生徒もいた。話すことに苦手意識をもつ生徒へは、活動が効果的に機能しなかったため、関わる人数に目標を立てるなど自ら進んで活動していけるように工夫が必要である。

5 反省と今後の課題

導入に本の帯を活用したことにより目的をもって作品に取り組ませることができた。本の帯を作成するために必要な要素を「登場人物」「伏線・あらすじ」「キーワード・メッセージ性」と項目を立てて分類したことにより、自分の考えと似た意見について整理することができた。しかし、各項目を広く設定しすぎたため、登場人物の人物像なのか、セリフなのか、行動なのかがはっきりせず、共有の場面でも戸惑う姿がみられた。さらに伏線とあらすじを一つの項目にしてしまったため曖昧さが生まれたり、意見が食い違ったりする場面もあった。似た意見を考えるために項目を立てたが、似た意見なのか違う意見なのか迷うことにつながってしまった。そのため、全体で共有する場面で意見が出にくかったと考えられる。導入部分できちんと整理をして全体で確認をしてから活動に移っていくことを大切にしなければならない。そして、似た意見なのか違う意見なのかという線引きも話し合いの中で考えていけるようにしていきたい。

自分で考え、ペアで共有をしてから、教室内を自由に動いて共有する時間を確保し、全体で共有する時間を設けたことにより、振り返りを行う時間を十分に確保することができなかった。活動の中では、周りの意見に流されて自分の意見を変えてしまう生徒もいた。また、教室内を

自由に動いて共有する時間を設け、話しやすい相手から自分の意見を伝えられるようにしたことにより、自分の考えを伝えることや相手の意見を聞くことに対し意欲的な姿が多くみられた。しかし、少人数のグループや決められた相手に対しては、話を聞くことに専念してしまい、自分の考えを伝えることまで到達できていない生徒もいた。今後は、自分の考えを伝え相手から意見をもらうことで、より自分の考えを深めたり、新しい視点を得て自分の考えが深まっていくことを実感できたりする活動を取り入れていきたい。

本単元の活動を終えて、生徒Aは「友達の意見を通して自分の意見を出したり、変えたりできるようになりました。」と振り返っている(資料2)。さらに、2学期末に行ったアンケートの中では「文を何回か読み直して考えられるようになってきた。」と回答している。1学期は「物語を読んで楽しかった。」と回答していたが、作品をくり返し読むことで新たな面白さや発見があることに気付くことができるようになってきている。さらに、自分の中で考えて完結させるのではなく、周りと関わることによって新たな視点を獲得したり、考えを深められたりしていた。

生徒Bは本単元の活動を「伏線を意識して読むことができました。」「キーワードがいつ、どんな場面で出てきたのかをまとめてみてもおもしろかったです。」と振り返っている(資料3)。2学期末のアンケートでは、「2学期は意識することを考えながら授業を受けることができていたと思う。だから、みんなの意見を少しずつ聞けるようになってきた気がします。」と回答している。元々国語に対して苦手意識が強く、作者が考えていることや周りの人が考えている意見に対して分からないと答えることが多かったが、活動を通して前向きに取り組むことができるようになってきている。さらに今回の自分で考え、ペアで共有をしてから、教室を自由に動いて共有する時間の中でも積極的に関わる姿が見られた(資料4)。全体で意見を共有する場面ではまだ発言はできていないが、ペア、グループ、

【資料2 生徒Aの記述】

友達の意見を通して自分の意見を出したり変えたりできるようになりました。伏線についてたどると、伏線がいつどこで出てきたのかをまとめてみてもおもしろかったです。この単元を通して伏線を意識して物語を読むことができてきました。また、キーワードがいつ、どんな場面で出てきたのかをまとめてみてもおもしろかったです。これから物語を読むときは伏線やキーワードをさがしながら読みたいと思います。

【資料3 生徒Bの記述】

この単元を通して伏線を意識して物語を読むことができてきました。また、キーワードがいつ、どんな場面で出てきたのかをまとめてみてもおもしろかったです。これから物語を読むときは伏線やキーワードをさがしながら読みたいと思います。

【資料4 生徒Bの活動の様子】



教室での活動を通して、少しずつ考えたことや気付いたことを級友と共有し、学びや成長につなげることができるようになってきている。今回の経験を次の学びへとつなげてほしい。クラス全体に行った「クラスの意見を聞くことで自分の意見を深めたり、新しい考えに気付いたりすることができるようになった。」というアンケート結果からは、僅かではあるが、「とてもそう思う」「そう思う」と感じる生徒が増えたことが分かった。とくに「とてもそう思う」と答えた生徒は2割近くまで増加している。さらに、1学期の同じ項目と比較したときに数値が上昇している生徒は31人中12人と4割近い生徒が周りの意見を通じて自分の意見を考えられるようになってきたことを実感していることも分かった。一方で、1学期と比べて数値が下がってしまった生徒の意見には「他の人の意見を聞くことで自分の意見よりもそっちの意見の方がいいと思うことが多かった。」や「よく発言する人の意見を聞くことで納得してしまうことが多かったため。」という記述もみられた。自分の意見に自信をもてていない生徒もいるため、自分の意見をなかつたことにしてしまうのではなく、比較したり、取り入れたりすることで深めていけるような活動が必要である。

今回は活動ごとに振り返りを行い、自分の学びの足跡を残していった。初発の感想を共有する場面で多くの意見が出て、全体で活動の方向性を共有することができたので、振り返りの中にも周りの人と関わって感じたことを書く生徒が多くみられた。さらに、前時までに蓄積した自分自身の振り返りと比較しながら考える生徒も多くみられた。1学期と2学期のアンケートの結果を比較したときにも「初発の感想と振り返りを比較しながら考えることができるようになった」という項目が最も数値が上昇する結果となった(資料5)。とくに「どちらでもない」と答えていた生徒が「最初に感じた疑問を授業の中で解決することができた」や「よく分からないと思っていたけれど、何度も話していくうちにちょっとずつ分かるようになった気がする」と振り返りを比較しながら考えることができるようになったことを実感していた。このことから周りに関わることと合わせて、自分の学びを振り返り、意見や考えを深めていく時間が大切であると考え、1時間の授業の中で、単元を通して、見通しをもって取り組める工夫を考えていきたい。

【資料 5 事前・事後アンケート】

